

群馬音楽センター

市民の熱意に触れ、近代建築の巨匠が建てた音楽の殿堂

群馬県高崎市の群馬音楽センターは昭和36(1961)年竣工。高崎市民などによる建設運動に共感した建築家、アントニン・レーモンドが設計した。日本で長く活躍したA.レーモンドの代表作であり、近代建築の傑作の一つとされる。公共建築百選。DOCOMOMO20選。



扇状の照明が美しい群馬音楽センター。客席(1,960席、竣工時)と舞台(1)の合計は1,961。これは竣工年を表していた。



照明
ホール天井。合板の裏に設置した間接照明が折板を照らしている。ここにも転倒防止の引張材の一部が見えている。



2階ホワイエ。外観で目を引くコンクリート打ちっ放しの折板壁は館内でもその蛇腹状の形を見ることができる。



ホール内の折板壁は内側に約12.6度傾いている。両壁側の階段は途切れることなく花道のように舞台へと続いていく。



ロビーと2階を結ぶ階段は踊り場の下に支柱を必要としない設計で造られた。折板の直線的な表情に対して、階段は曲線的なデザイン。らせんを描くように延び、手すり周りを円形、三角形などの幾何学模様彩る。



2階ホワイエを飾る、A.レーモンド自筆の原画をもとにつくられた世界最大級のフレスコ壁画『リズム』。ガラス窓に沿って並ぶベンチのデザインはレーモンドとノエミ夫妻が手がけた。

群馬音楽センターは高崎城址の石垣や木々を間近にして建ち、紙を蛇腹に畳んだようなRC造で折板構造の外壁・屋根、ガラス窓の大開口ファサードなどが来館者を迎える。近代建築の先駆者、A.レーモンドは、高崎市の実業家・井上房一郎との出会いを通して設計を引き受けた。当時、音楽センター建設を熱望する人々は資金の寄付などの運動に取り組んでいた。設計に際しては、クラシック音楽向けの上質なホールであることはもとより、歌舞伎などの古典演劇が上演可能であることも求められたため、2つの設計案を経てそれらを

実現する最終案に至った。

折板構造の蛇腹の形は天井や壁となって館内にもそのまま現れている。ホールでは、折板の凸部を間接照明で照らしてアーチ状の、見る角度によっては稲妻のような光の帯をつくりだした。ホールは扇形をした無柱空間であり、この光のアーチによって視線が舞台へと誘われる。2階席などは設けず、全客席を同一面に配置したことや、両壁側の階段を歌舞伎の花道のように舞台につなげたことも観客と演者・舞台の一体感を狙ったためとされる。

折板は仕上げ材を使用しないコンクリート打ち

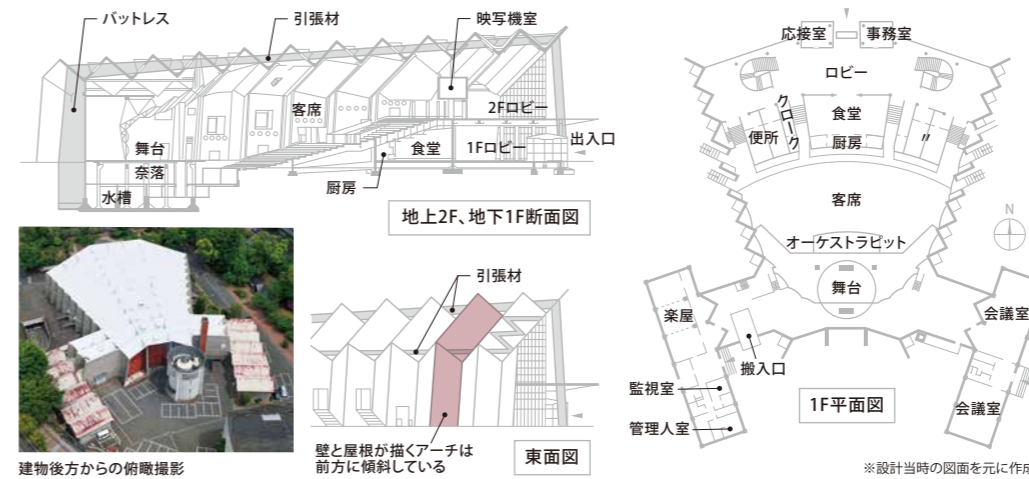
放しとして建設費を抑える一方、ホール内では吸音や残響を考慮して合板や反響板を設置している。また、屋根の厚さがわずかに約12cmであるように、折板構造の採用によってコンクリート・鉄筋使用量が大幅に少なく済んだことも限られた資金による建設を支えた。当音楽センターは、A.レーモンドの設計理念「自然に。より単純に。より直截に。より経済的に。こころから」に基づいて設計された。そして、建設前から現在に至る60余年の長きにわたって多くの人々に愛され、活用されている貴重な建築物である。



蛇腹状の折板と約60mの大開口がダイナミックな外観。剛性に優れた折板構造の特性を生かした屋根は厚さわずか約12cm、壁は約25cm。



屋根を貫く引張材が見える。壁と屋根が描く各アーチは同一平面上になく前方(写真右)に傾斜しているため、舞台側に引っ張り、転倒を防止。舞台側末端は建物後面のバットレスに定着させている。



建物後方からの俯瞰撮影

壁と屋根が描くアーチは前方に傾斜している

東面図

※設計当時の図面を元に作成

用語説明

【公共建築百選】旧建設省が公共建築の意義、重要性について理解を得るため、市民に親しまれ、地域に根ざした優れた公共建築(昭和23年以降の建築)から選定。

【DOCOMOMO】モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査及び保存のための国際組織。DOCOMOMO Japanは、日本の近代建築の再評価のための活動などを行う。

【井上房一郎】高崎市の文化振興に寄与。群馬交響楽団の創設、群馬音楽センターなどの設立に尽くした。

群馬県高崎市高松町28-2
協力:公益財団法人 高崎財団、株式会社レーモンド設計事務所

